

# 国語力向上プロジェクト

## A project to improve the faculty for Japanese language

教育学部：平澤啓

A. HIRASAWA

研究代表者連絡先：hirasawa@center.wakayama-u.ac.jp、電話073-457-7281

**要約：**小学校国語科の学習を通して正確な文を作成するところまでを目標とする場合、漢字・語彙・文法を総合的に学習することが有効であり、具体的には新出漢字・読み替え漢字、および、難語句を学習する際、接続助詞を含む重文、すなわち、従属節と主要節から構成される短文を作成することが有効である。したがって、こうした点を理解し、実践できる力を備えた教員の養成が国語力向上には不可欠である。

### 1. はじめに

日本語を第一言語とする者の日本語能力を国語力ととらえ、それを小学校から高等学校までの12年間の学校教育でどのように実践すべきかについて考えるべく、調査対象となる小学生・中学生・高校生の人数がほぼ均等に揃い、また、種々の発達段階で調査できるよう、公立の小学校6校、中学校2校、高等学校1校の協力のもと、調査・研究を試みた。本来、その全体について報告すべきであるが、紙数の関係上、基礎的な日本語能力の向上・定着に視点を当て、小学校教員養成について報告する。

また、日本語能力を考える際、厳密には国語科という限定された教科の範囲ですべて解決できるものではないが、言語事項が国語科に設定され、国語教科書にそうした教材が収録されていることから、本稿では小学校国語科のなかで考えていく。

### 2. 研究方法

日本語能力を漢字・語彙・文法の3側面からとらえるという立場から、児童の日本語能力の実態調査を公立の小学校で実施し、それぞれの側面で特に指導を要する項目を探していく。

そして、漢字・語彙・文法のうち、教科書教材の活用によって解決できる可能性の高い漢字・語彙については、教科書教材の活用法を考えたい。逆に、教科書教材の活用だけでは解決しにくい文法については、新たな方策を考えたい。

### 3. 漢字

漢字については「読む」「書く」「音訓を切り替える」の3項目について調査したところ「読む」「書く」に対して「音訓を切り替える」の項目で課題が見られる。これは、たとえば、漢語「強風」を音読「キョウ」「フウ」で読むとともに、意味を訓読「つよい」「かぜ」から理解するだけでなく、適切な漢字を選択して漢語「強風」を表現するなど、語彙と密接に関連する。

これに関する、言語事項の教科書教材は確かに収録されているものの「音訓を切り替える」力をどこまで児童に意識させるかについては必ずしも十分な配慮の見られないものが多い。また、物語文・説明文教材などでも、新出漢字に比べ、読み替え漢字については必ずしも十分な学習時間を確保せずに「読む」学習にとどめ「音訓を切り替える」学習にまでは踏み込んでいない実態、すなわち、語彙に関連する漢字学習であるはずが、語彙と漢字とを分離した学習にとどめていると見られる。

そこで、物語文・説明文教材などに出てくる読み替え漢字の学習に際して、特に音訓を切り替える必要性の高い漢字、すなわち、多くの漢語の構成要素になる漢字を選び、音訓を切り替える活動を継続的に実施したところ、既習の漢字の復習になるだけでなく、漢字を「読む」「書く」学習を好まない児童が漢字学習への意欲を持ち直すなどの効果も認められた。調査期間が短かったため、漢字の力自体の向上

までは顕著な結果が得られなかったものの、漢字学習に意欲を失っている児童を、再び、漢字学習に取り組ませられることに加えて、復習を含めた漢字学習の機会が増えることは、おのずと漢字の力の向上が期待できるものと思われる。したがって、言語事項としての教材にとどめず、物語文・説明文教材などに出てくる、特に読み替え漢字の学習を、漢字の力を向上させる機会と教員が意識することの重要性が考えられる。

次に、3・4年生を対象とした補助教材2つを試みた。ひとつは、漢字カードの並べかえである。たとえば、漢字カード「遠」「音」「書」「先」「足」「店」「読」「生」を用意し、最初に位置する漢字（「遠」）を緑で、最後に位置する漢字（「生」）を赤で、それ以外の漢字を黒でそれぞれ記し、「遠」→（エンソク）→「足」→（あしおと）→「音」→（オンドク）→「読」→（ドクショ）→「書」→（ショテン）→「店」→（みせさき）→「先」→（センセイ）→「生」のように並べかえるものである。もうひとつは、漢字カードと仮名カードの組み合わせである。たとえば、漢字カード「自」「母」「声」「数」「広」を机上に並べ、仮名カード「わかる」を示し、その漢字と組み合わせ可能な「自分」または「分母」が答えられた場合に漢字カード「自」または「母」が、次の仮名カード「おおきい」を示し「大声」または「広大」が答えられた場合に漢字カード「声」または「広」が、それぞれ獲得できるというものである。遊びの要素が含まれるため、当然、児童は興味を持続させることになり、漢字が単なる学習の対象であったものが、遊びの道具にもなることが分ければ、少なくとも漢字の学習に意欲を失った児童に、再び、学習意欲を持たせることは期待できるものと思われる。比較的、容易に作成できるうえに、教科書教材の同様のものでは、漢字が一律になっているのに対して、担任する学級の児童にとって学習する必要性の高い漢字を選ぶことも可能なため、児童の実態に合った教材にもなる。したがって、補助教材の有効性、「音訓を切り替える」活動を含む、補助教材の具体例を理解することの重要性が考えられる。

#### 4. 語彙

語彙については、語の単位に属する「和語」「漢語」「洋語」と、語より大きな「慣用句」（たとえば「手を引く」のように、2語それぞれの意味とは異なり、2語以上でひとつの意味を表わすものであり、こと

わざ・格言を除く）の4項目について調査したところ「和語」「洋語」に比べ「漢語」「慣用句」の2項目で課題が見られる。

漢語は前節で記したとおり、漢字の学習と対応させることが語彙の数を増やすうえで有効であると考えられるが、語彙を理解語彙なり使用語彙なりで児童に定着させるには、それ以外の方策を講じる必要がある。

一体に国語辞典・漢和辞典の使用法を学習すると、物語文・説明文教材に出てくる難語句の意味を辞書で調べる活動が始まるが、児童の様子を観察すると、複数の意味が記述されている語については機械的に最初に記述される意味を取り、文脈に照らし合わせて、その意味の正誤について確認する姿勢があまり見受けられない。これでは辞書を活用するどころか、道具として辞書を利用することの有効性さえ理解できず、語彙の定着は期待できない状態である。辞書は語彙の力、とりわけ、語彙の数を増やすための道具ではなく、語の意味などを確認するための道具であることを教員が理解すれば、物語文・説明文教材などで難語句の意味を辞書で調べる活動が、辞書の有効性を理解することをも目標に含めたものになる可能性がある。そのためには、難語句を辞書で調べるのではなく、難語句であるかいかにかかわらず、主題や主旨をとらえるうえで意味を正確に理解する必要のある語句だけを辞書で調べ、調べた語句の意味が主題や主旨をとらえるのにつながることを有効である。したがって、辞書を最終的には文章の主題や主旨をとらえるための道具として見るのが教員に求められる。

また、文脈から意味の不明な語句の意味を類推することを苦手にする児童も少数にとどまらない。たとえば、小学校1年生「天にのぼったおけや」（大阪書籍）では冒頭に「のんきもの」が出てきて、児童に「のんき」の意味を説明するものひとつの方法ではあるが、主人公「おけや」のふたつの場面での言動が描かれている教材文であり、最後まで読んだところでそれらを総合して「のんき」の意味を理解する方法も考えられる。当然、後者は文脈から語句の意味を類推する活動になり、こうした活動の積み重ねが文脈から語句の意味を類推する力を向上させることにつながるのではなかろうか。したがって、辞書と同様、物語文・説明文教材を読む学習のなかで語彙の力を向上させる発想が教員に求められる。

同様に、慣用句も辞書で意味を調べる活動は盛んに行なわれているものの、辞書で調べるところで終わる場合が多いのは漢語と同様であり、辞書の活用法について教員の発想を変える必要がある。

## 5. 文法

文法については「短文作成」「活用（語形変化）」「格助詞」「接続助詞」「名詞に対する適切な動詞の選択」「動詞に対する適切な名詞の選択」の6項目について調査したところ「短文作成」「接続助詞」の2項目について課題が見られる。

短文作成と接続助詞を個別に指導する方法も考えられようが、日本語の文は接続助詞を用いた重文を多用することを考慮すると、短文作成と接続助詞とを同時に指導していく方法が、書く力や話す力を向上させるには有効であると考ええる。試みに、低学年で新出漢字を学習する際、漢字の学習にとどめず、学習した漢字を用いて単文（節を1つだけ含む文）を作り、徐々に修飾語を増やしていく活動から始め、次に接続助詞「て」を用いた重文（従属節と主要節の2つの節を含む文）を作成する段階へ進めた。次に、中学年では低学年と同様、新出漢字・読み替え漢字を学習する際、また、難語句を学習する際、接続助詞「し」と「が」「けれども」「のに」「ても」を用いた重文の作成から、接続助詞「から」「ので」と「ながら」そして「ば」「と」を用いた重文の作成に進めた。その際、接続助詞「て」と置き換えられる接続助詞については「て」を用いずに短文を作成するよう助言していくことによって、それぞれの接続助詞を正確に使うことが可能になってくる。適切な接続助詞を選択させる問題を練習する方法がよくとられていて、これによって読む力を向上させる効果はある程度まで期待できようが、書く力や話す力を向上させるにはどこまで効果が期待できるか、疑問が残るのに対して、短文作成では書く力や話す力の向上に一定の効果が認められた。

また、通常、短文作成ではひとつの語句だけを用いることが多いが、接続助詞を含めることを条件とすることから、実際には2つの語句を同時に用いることが条件になる。このため、児童にとって負担が重くなるものの、これまでのところ、教員が適切に助言すること、および、作成した短文を児童が発表することによって児童が多くの短文を読む機会を設けること、この2点で徐々に負担が軽減されていく様子がうかがえる。

単文による短文作成をすべて否定するつもりはないものの、現実には日本語では重文が多用されていることを見れば、重文による短文作成を進めていく方が、語の意味・用法を正確に理解する力をつけるにとどまらず、正確に使用する力にも波及していくことが期待でき、したがって、重文による短文作成の取り組みが求められる。

## 6. 漢字・語彙・文法の連関

すでに漢字と語彙の連関については指摘したとおりであるが、前節で記した、重文による短文作成も、漢字や難語句の学習の際に実施していくものであり、結局、漢字・語彙・文法を包括した学習活動になる。このように考えると、言語事項に関する教科書教材を利用するのではなく、むしろ、漢字および難語句の学習を国語力向上の機会に活用することになってくる。

確かに学習すべき漢字の数が多く、漢字の学習に語彙・文法の学習を含めることは容易ではない実態もあるが、漢字・語彙・文法を個別に学習することを繰り返すうちに、児童が漢字・語彙・文法を有機的な結びつきをもったものとして理解しなくなる危険性を考えれば、それこそ国語力の向上とはほど遠い指導になってしまう。語と語を正確に結びつけ、ひとつの文を構成するのが文法である以上、語彙の力は不可欠であり、完成した文は漢字・仮名交じりで書かれる以上、漢字の力も不可欠である。さらに、発達段階に応じて、和語だけを用いる段階から、漢語・洋語を自由に駆使していく段階へ進んでいくことが避けられず、漢語を含む、重文による短文作成が、単に国語科の学力にとどまらず、すべての教科の学習に必要な国語力の向上につながることを期待できる。したがって、教員が漢字・語彙・文法をそれぞれ個別の学習対象と見ず、逆に、これらを総合した学習活動に取り組む必要がある。

## 7. むすび

以上、漢字・語彙・文法の3側面から国語力向上に資する教員の養成を考えてきた。あくまで文を構成する段階までを考えてきて、文章を構成する段階については今後の課題であるが、正確な文を構成するだけの国語力を向上させることについては、次のようにまとめることができる。

- 1 漢字・語彙・文法を総合した学習の効果を理解し、新出漢字・読み替え漢字漢字、および、難語句の学習の際に、重文による短文を作成する指導

法を実践できる教員を養成する必要がある。

- 2 その指導を実施するのは、新出漢字・読み替え漢字では、特に多くの漢語の構成要素になる漢字を学習する場合に限るなど、学習する機会を正確にとらえる力も備える必要がある。
- 3 また、言語事項に関する教科書教材を利用することができないものの、短文作成が中心的活動になるため、作成した短文を児童が発表する機会を増やすことが、児童にとって多くの教材に接することになることを理解し、短文作成と発表で授業を展開する力が求められる。